

# Glocal Tenri



1

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.1 January 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
共同作業としての「対話」  
／井上 昭洋 ..... 1
- ・ 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」  
(9)  
本連載における「翻訳」について⑧  
／加藤 匡人 ..... 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (17)  
台湾伝道庁の設置とその背景  
／山西 弘朗 ..... 3
- ・ 社会福祉からみる現代社会—天理教の社会福祉活動に向けて— (12)  
社会的養護における天理教の社会福祉活動 (2)  
／深谷 弘和 ..... 4
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (34)  
21世紀のライシテと天理教のフランス布教④  
／藤原 理人 ..... 5
- ・ イスラームから見た世界 (27)  
イスラームの人間観①  
／澤井 真 ..... 6
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (31)  
7. コロンビアの非日常1：お祭りの話 その3  
／清水 直太郎 ..... 7
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 8  
スペインでの国際会議に参加／2023年度宗教研究会を開催「アヴラム・デヴィッドソンのキプロスとトルコへの旅」

## 巻頭言

### 共同作業としての「対話」

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

北米の文化人類学の分野では、1980年代中頃より、それまでの研究において人類学者の声が支配的であったことへの反省から、調査者（人類学者）とインフォーマント（ネイティブ）の「対話」を積極的に取り込むことで、解釈の生成プロセスを可視化させた民族誌が書かれるようになった。ポスト解釈人類学とも位置づけられるこの流れのなかで、幾つかの実験的民族誌が上梓された。

昆虫学者がフィールドで採集し標本箱に収める昆虫のように、宝石コレクターがフィールドで発掘し磨きをかける原石のように、人類学者の研究対象とする「文化」はフィールドに転がっているわけではない。調査者の解釈はフィールドでダイアロジックに、間主観的に形成される。そのことを考えれば民族誌への「対話」の導入は、必然であったのかもしれない。その後、1990年代末より、それまで被調査者であったネイティブが人類学者として自らの文化を自らの言葉で語ろうとするネイティブ人類学、ネイティブと人類学者の協同による協同民族誌学など、文化のインサイダーとアウトサイダーの対立的な関係性を乗り越えようとする研究が展開されてきている。

文化人類学、特に民族誌学における方法論としての「対話」は、生身の人類学者とネイティブの間だけでなく、ネイティブ人類学者とその内なる他者との間でも成立する。前者においては、先に示した対話による民族誌的研究、調査者と被調査者による協同民族誌学研究が行われる。一方、より実行するのに困難を伴うのは、後者のネイティブ人類学の研究であろう。自らの文化をアウトサイダーとして語ること、人類学理論を文化のインサイダーとして用いること。そのようにして内なる他者を持ち続けることの困難性は、すでにこれまでの巻頭言で指摘してきた。

リアルな生身の人間同士の対話であれ、

内なる他者との対話であれ、文化人類学において注目されてきた「対話」概念は、ますますその重要性を増している。ただし、リアルな対話であれば、それを生産的な共同作業として営むことのできる相手が必要になる。また、共同作業を営むことができたとしても、意見の対立を避けるような対話からは刺激的な結論は生まれないだろう。

一方、内なる他者との対話においては、予定調和的な答えにしか辿り着けない可能性がより高くなるかもしれない。だからこそ、自身の信仰する宗教を研究する宗教学者や人類学者は自分のなかに Devil's advocate (悪魔の代弁者) を持つことをより真摯に考えねばならないと思う。

ところで、新たな天理教学の可能性を考える時、同様に「対話」の重要性が立ち上がってくる。信仰者の天理教学者と未信者の宗教学者との間でなされるリアルな対話、最も容易に想定できる対話だろう。だが、ネイティブ宗教学としての天理教学を考える時、より重要となってくるのは、天理教を信仰する宗教学者（もしくは人類学者）が天理教学を営む際に、どのように内なる他者と対話するのかという問題である。

「元初まりの話」では、泥海のなかで月日両神が相談のうえ、人間をつくり、その陽気ぐらしをするのを見てともに楽しもうと、この世界を創造されたと説く。人間世界を創造すべく、くにとこたちのみこと（月・大竜）とをもちのりみこと（日・大蛇）の間でなされたこの「そふだん（相談）」こそが、究極の対話ではないだろうか。混沌のなかから月日親神が対話によりこの世界を創造したことに、自分の信仰する教えを自らの学問でダイアロジックに追究するモデル（雛形）は示されていたのではないかと思う。

それからハたしかせかいを初よと

神のそふだんしまりついたり 六号 39

## 本連載における「翻訳」について ⑧

前回(11月号)の最後の部分で、タラル・アサドが自身の考える「翻訳」について触れている箇所を引用した。そこでは、翻訳は単純に言葉を別の言葉で置き換えるような「純粋に認知的な行為」ではなく、むしろ「ある文脈の中で、特定の音や像、そこから生じる感情を想起させる表現の複合体であり、行動や態度を現実化するものである」とされていた。そしてその意味で、アサドは翻訳という行為を言葉の置き換えではなく「変形」と述べている(アサド 2018 = 2021 : 13-14、傍点は原文ママ)。

アサドはこの考え方を下敷きにしなが、宗教的言語の「翻訳」についての議論を進めていくが、その中でハーバーマスの翻訳の捉え方について批判を加えている。その一つは、ハーバーマスが宗教の「賦活力 (inspiring power)」について、それが「世俗の政治システムに必要であると同時に、普遍的な一すなわち世俗的な一言語によって、信仰を持たない人々にもアクセス可能であると考え」ている点である(同上 : 69)。これは、以前にも紹介したハーバーマスの翻訳の議論、すなわち宗教的市民がリベラルな政治に参加する場合には、宗教的言語が示す内容を誰にでもアクセスできるものにするために、それを世俗的言語に「翻訳」する必要があるという基本的な論点に関わる議論である。

このハーバーマスの議論について、アサドは以下のように述べている。

宗教的な「啓示 (inspiration)」は、聖なる意図に由来するのだろうか。それとも宗教的な物語の新しい(世俗的な)目的のための人間による理由付けに由来するのであろうか。もっと直接的に言えば、宗教的「啓示」は信仰者に対するのと同じ働きを、非信仰者に対しても持つのであろうか。ハーバーマスは、次のように応答するかもしれない。政治の領域においてのみ、そうであると。しかし、信仰者は、彼らの生活における絶対的な優先性を政治に与えようとはしないかもしれない。そして、宗教的言説が、本質的には世俗の政治的利益の手段であるということ認めようとはしないかもしれない。こうした懸念は否定されるべきなのだろうか。(同上 : 69-70、傍点は筆者)

ここでアサドは、宗教的な「啓示」が信仰者而非信仰者に対して同じような働きをするのかと問いかけている。そして信仰者はおそらく、自身の拠り所とする宗教的な「啓示」を「政治的利益の手段」に矮小化することは望まないのではないか、という懸念を述べている。

そしてそこから続いて、詩人のT・S・エリオットが、「啓示」という概念を宗教的・世俗的な意味で捉えようとした文章を引用した上で、次のように述べている。

彼〔訳者注 : T・S・エリオット〕の示すところでは、預言者(「宗教的」人物)と詩人(「世俗的」人物)は、あるものを共有している。それは、真実ではあるけれどもその意味を完全には理解できないものに直面している、という感覚である。啓示の翻訳は(まったく不可能ではないにしても)容易ではない。それはまさに、その言語が多義的であり、不確定であり、不透明であるからであり、また、その限りにおいてである。考えたり行動したりする特定の方法を解放したり固定したりすることによって、例えば、自ら

の無力さを解消するように応答したり、逆にその無力さを深めたりすることによって、言語が主体に対して正確に何を行っているかは、言語の使用者や聴取者の管理下にあるわけではない。ハーバーマスの翻訳に関する考え方は、あたかも「抽象的な」認知過程において必要とされるような、ある語を別の語と置き換える(あるいは回りくどくいいかえる)ことであるように思える。詩的な言語や預言者の言語に表現される感性的な関わりの要求は、排除されるのである。(同上 : 70-71、傍点は筆者)

ここでは、以前にも触れた宗教的言語の翻訳不可能性について述べられている。すなわち、啓示はその言語の表現の曖昧さや多義性も相まって、預言者や詩人であってもその意味を完全には理解できないものであり、それは宗教的言語だけでなく世俗的言語である詩においても同様であるという指摘である。

さらに、ここで筆者が重要と考えるのは、上記の引用の最後の方に述べられている二つの指摘である。一つは、ハーバーマスにとっての「翻訳」が、「あたかも『抽象的な』認知過程において必要とされるような、ある語を別の語と置き換える(あるいは回りくどくいいかえる)ことであるように思える」という点である。もう一つは、ハーバーマスの「翻訳」の考え方に従えば、「感性的な関わりの要求は、排除される」という指摘である。

なぜこの二つが重要かと問われれば、それは今回の冒頭で再確認したアサドの翻訳の捉え方に直結する内容だからである。すなわち、「翻訳」とは「純粋に認知的な行為」ではないという点、そして「特定の音や像、そこから生じる感情を想起させる表現の複合体であり、行動や態度を現実化するものである」という点である。純粋に認知的な行為に対置される形で「感性」「感情」「行動」「態度」といった言葉が並べられているように、アサドの考える「翻訳」の射程はハーバーマスとは大きく異なるのである。

そしてアサドは、自分のものとは違った言語と向き合う時にとるべき態度について、以下のように論じている。

もし言語がわれわれのこの世界での生き方の一部であるとすれば、異質な言語はわれわれの政治に対する啓示の源泉になり得るだけではない。なじみのない言語は、特定の生のあり方の具現化である。その曖昧さ一言語的な翻訳のしにくさ一は、その言語の貧しさや非合理性の証拠であり、それゆえ信用に値しないと考えるのではなく、聴取者や読者が、他の生の形態について想像し、それを生きることによって、われわれの言語の限界について考える機会であると考える時に、われわれの言語と同等になるということができるかもしれない。(同上 : 74-75、傍点は筆者)

ここではさらに踏み込んで、自分にとって「なじみのない言語」は、ある「特定の生のあり方」を具体的に表しているものであり、それが翻訳しにくいのは当該言語が非合理的なわけではなく、むしろそれは自分自身の言語で理解できる限界を示しているのであり、その他者の生のあり方を想像し、それを生きることによってこそ、はじめて同等の言語として翻訳が可能になるという意味とも捉えられよう。

[引用文献]

タラル・アサド(荻田真司訳)『リベラル国家と宗教—世俗主義と翻訳について』人文書院、2021年。

## 台湾伝道庁の設置とその背景

戦前の台湾における天理教を考えるために、台湾伝道庁の設置について述べておきたい。

台湾伝道庁の設置は1934（昭和9）年8月26日、本部月次祭後の本部員会議にて決議された。台北市東門町160に仮庁舎を置き、福岡教務支庁長の佐治正嗣が庁長に就任した。なぜ福岡教務支庁かと言えば、それまで台湾が福岡教務支庁の所管となっていたためである。佐治の前任者である松村義孝が福岡教務支庁長を務めていたときから、すでに教務支庁内に台湾伝道庁の前身にあたる組織があったために、形としては松村を初代庁長とし、佐治を2代庁長とすることになった。またこのとき、畑林為喜が書記に就任した。

1936（昭和11）年2月、書記を務めていた畑林為喜が3代庁長に就任した。同年12月26日に、「お目標<sup>めど</sup>」が下付され、台北市御成町15番に新しい伝道庁が建設されることとなった。翌年1月9日に2代真柱が渡台し、新築落成につき鎮座祭が執行され、翌日には奉告祭が執行された。3月には畑林に代わって紺谷金彦が4代庁長に、橋本武が書記にそれぞれ就任した。1939（昭和14）年に台湾伝道庁管内に華南出張所が設けられ、橋本武が所長に就任した。また三濱善一が伝道庁主事長に就任した。翌年、華南出張所は伝道庁に昇格した。

1939（昭和14）年に5代庁長として上原繁雄が就任し、3年後には前回（11月号）紹介した天理教校台湾講習所が上原庁長を校長として開設されるなど、ようやく発展の様相を示すようになったころ、日中戦争のため戦時体制が強化されるようになり、自由な布教活動が難しい状況になっていった。1944（昭和19）年には三浦清太郎が6代庁長に就任したものの、就任後1年余りで日本は敗戦し、日本人は内地への引き揚げを余儀なくされた。そして、伝道庁は日産（日本人の財産）として、戦後台湾を統治することとなった国民党政権によって接收された。

以上が、戦前の台湾における伝道庁の設置とその後の流れについて簡単にまとめたものである。台湾は日清戦争の講和条約である下関条約によって日本の領土として割譲され、1895（明治28）年から日本の統治下になった。その後、これまで紹介してきたように防府支教会（現在の防府大教会）の古谷マツが単身で1896（明治29）年に台北に渡り布教を進め、1903（明治36）年に台府宣教所の設置へとつながった。また1897（明治30）年には山名分教会（現在の山名大教会）の諸井国三郎会長自ら率先して組織的な台湾布教を展開し、台中、台北、台南の各地に拠点を設置した。この布教は、同じ系統の加藤さんが設立した嘉義東門宣教所をはじめ、嘉義宣教所、打狗宣教所の設置を促した。このほか、南海系統が力を合わせて、台州宣教所、新竹宣教所を設立した。さらに、天理教婦人会が1929（昭和4）年に台湾布教を計画し、1934（昭和9）年に臺北臺婦宣教所の設置につながった。このように、台湾が日本の統治下になってまもなく、単独布教や系統や婦人会をあげての組織的布教によって各地で布教が展開され、教会や宣教所の設置に至っ

たが、台湾での日本の統治が40年を迎えるころに伝道庁が設置されることとなった。

この理由について2代真柱は『台湾遊記』の中で次のように述べている。「最初の訪れの置土産は、台湾伝道の更生促進であった。天理教の海外布教史から云うとその第一頁を飾っている台湾伝道が、今日では最もと云うてよい程不振である。その更生に力をいたさんと設けたのが伝道庁であり、昨昭和11年春、早くも第一次の工を終った」（1～2頁）。2代真柱は、1934（昭和9）年の夏にはじめて台湾に訪れた際、台湾での布教活動が不振に陥っていることを目の当たりにした。そこで伝道庁を新しく設置することを決め、さらなる更生と促進を目指すことになったというのである。こうして、名実ともに伝道庁の建物が完成し、伝道庁を中心とした活動ができるようになった。しかし、1937（昭和12）年から終戦まではわずか8年間という短い期間となった。

これとは対照的に、朝鮮半島における天理教伝道は早くから伝道庁の機能を担った布教管理所を中心として展開された。朝鮮半島における天理教の布教は、1893（明治26）年頃、高知分教会（現在の高知大教会）の里見治太郎が釜山ではじめたのが端緒とされる。布教が活発になるにつれて信者の掌握や布教状況を把握する上から、1908（明治41）年9月24日に釜山に韓国布教管理所を設置し、初代管理者として松村吉太郎が就任した。

この管理所は1911（明治44）年6月に京城（現在のソウル）に移転建築され、名称も天理教朝鮮布教管理所に改められた。当初、布教師は日本人ばかりであったため、韓国人布教師養成が喫緊の課題となり、1916（大正5）年に管理所内に朝鮮教義講習所を開設した。開所当初は日本人入学者が多かったが、1929（昭和4）年に日本人の入学が許可されなくなって以来、名実ともに韓国人の天理教教師養成機関として定着し、布教管理者は2代目に上田民蔵、3代目に春野喜市がそれぞれ就任した。1926（大正15）年に4代目として澤田善次郎が就任し、この年に2代真柱がはじめて京城と釜山を巡教し、天理教青年会本部朝鮮出張所開所式にも臨席した。この後、5代目に土佐敏一、6代目に上原義彦、7代目に岩田長三郎が就任し、終戦を迎えることとなった。

戦前日本の植民地とされた台湾と朝鮮では、異なる動きがあった。早くから福岡教務支庁の所管とされた台湾では、布教の不振を更生促進するために伝道庁が開設された。一方、朝鮮では独自に布教管理所を設置し、現地人布教師養成に取り組んだ。この布教体制の違いは、戦前の内地からの眼差しの違いを反映し、戦後の状況にも大きな影響を与えるようになるのである。

[参考文献]

高野友治編（1997）『天理教史参考年表』養徳社。

天理大学おやさと研究所編（1989）『改訂 天理教事典 教会史篇』天理教道友社。

## 社会的養護における天理教の社会福祉活動 (2)

天理大学人間学部准教授  
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

前回は、社会的養護における天理教の社会福祉活動について、施設養護と里親活動を整理した。今回は、天理教里親連盟(以下、里親連盟)が発刊している雑誌『さとおや』を元にして、天理教における里親活動の背景と、里親の信仰的な気づきについて整理する。

## 天理教における里親活動の背景

天理教の社会福祉活動として、里親活動が活発におこなわれている背景を整理する。

1点目は、里親同士のネットワークである。里親は、社会的養護を必要とする子どもを預かり、養育するという点から、周囲から特別な存在としてみられ、養育が困難なケースを養育している場合もあることから、地域で孤立することが課題になっている。特に、自らの意思によって里親登録をおこなった人にとっては、「手を挙げた以上は、頑張らなければならない」という思いを強め、相談することができないことも出てくる。そうした里親を支援するために、政策としては、里親支援専門機関が制度化され、相談員によるサポートやサロン活動がおこなわれている。天理養徳院も里親支援専門機関として奈良県内の里親のサポートをおこなっている。こうした支援に加えて、天理教の里親活動では、天理教里親連盟に加盟することで、天理教内の里親同士のつながりを得ることができる。天理教里親連盟には、450家庭が加盟しており、さらに「教区里親会」があり、現在29の教区里親会が発会している。そして全国の天理教の里親が交流できる「里親サロン」を開催するなど、里親同士の交流が盛んにおこなわれている。加えて、長年の里親経験を活かし、天理教の信仰を活かした養育法の開発として「天理教ファミリーコミュニケーションアプローチ(TFA)」が開発され、里親の技術向上や、里子との関係構築への独自のサポートがおこなわれている。

2点目は、教会で人を預かる経験が積み上げられていることである。これまで天理教の教会は、身寄りのない人や、何らかの理由で暮らす場を失った人を教会で受け入れる信仰実践が積み上げられてきた。教会で育った教会長夫妻は、そうした経験を有しており、住み込み人を抱えてきた経験が、里親活動をはじめきっかけにもなっている。また、すでに、住み込み人が暮らす教会では、里親登録をしている教会長夫妻に加えて、複数の大人で養育することが可能であり、また、生きづらさを抱えた住み込み人が里子との関係の中で変わっていく経験などが、手記には寄せられている。血縁の家族以外と一緒に暮らす苦労だけではなく、そのノウハウが、天理教内では積み上げられてきており、先述したネットワークを活かして、問題解決や精神的安定を図ることができることも里親活動の背景にはある。

3点目は、措置解除後の「実家」としての機能である。児童養護施設や里親家庭で育った社会的養護経験者は、近年、「ケアリーバー」として注目される。それは、原則として児童福祉法の対象である18歳で、社会的養護から措置解除となり、自立生活をはじめた後に、生活困難を経験するケースがみられるからである。そのため、アフターケアと呼ばれる措置解除後の

支援が重要となるが、天理教の教会では、里親活動をおこなっているかどうかに関わらず、生活に困難を感じている人を「おたすけ」として受け入れており、里子にとっては、措置解除後も「実家」として、教会を拠り所とすることができる。里子の中には、里親との生活経験を通して、入信する場合もあり、教会の信者同士のつながりや、天理教内で、同じ里子としての経験を持つ者同士のつながりを得る里子もいる。こうした背景によって、天理教の里親活動が広くおこなわれている。

## 里親自身の信仰的な気づき

では、里親活動をおこなう里親自身には、どのような信仰的な気づきがみられたのかを認確していく。

里親と里子のマッチングは、児童相談所からの依頼によっておこなわれるが、マッチングされた里子に対して「神様が縁をつないでくださった」と捉えている手記が多い。また、『さとおや』の表紙裏には、天理教里親信条と共に「子どもを育てあげるのではなく、子どもに成人させてもらうんだ。それが、お道の里親なんだよ。」という標語が掲載されているように、里子への養育を通じて、自らを省みることが大切にされている。こうした信仰的な土台は、里子の養育上で感じる困難に際して、大きな力を発揮している。里子の中には、不適切な養育環境や被虐待経験により、十分な愛着を形成することができず、暴言や暴力などの行動や、不登校や非行となった課題を抱える場合もある。これらの中には、里親との関係性を築こうとする子どもの「試し行動」も含まれるが、上記のような信仰的な土台は、「神様が里子を通して、自分を変えようとしてくれている」という気づきを生み、養育での困難と向き合うことにつながっている。特に、養育の難しさを抱えた際には、教祖伝逸話篇86「大きなたすけ」での「人の子を預かって育ててやる程の大きなたすけはない」「世話さしてもらおうという真実の心さえ持っていたら、与えは神の自由で、どんなにでも神が働く。案じることは要らんで」との教祖の言葉を支えにしていることが手記では寄せられている。「神様によって里子を引き寄せてもらった」「里子を世話することで、自らがたすかかっていく」という「いんねんの自覚」や、その上で、里親自身と里子に起こってくることを受け止め、「たんのう」するといった教義に基づく里親養育がおこなわれている。

こうした信仰的な気づきは、里親をする教会長夫妻だけではなく、その実子にもみられる。実際に、筆者が所属する天理大学の社会福祉専攻には、「両親が里親をしており、もっと社会的養護について学びたいと思った」という理由で入学する学生も多い。『さとおや』でも実子の手記がいくつか掲載されているが、里子の養育にかかりっきりになる親に対して不満を持つ時期もあるものの、親が懸命に取り組む姿勢や、実際に里子の壮絶な過去に出会うことで、「自分も里子に負けまいように一生懸命に生きなければ」という気づきを得ている手記もある。

児童相談所への相談件数が年々増加する中であって、天理教による里親活動は社会的にも大きな役割を果たしていると共に、またその信仰的な土台が天理教の里親活動を支えている。

フランスには Miviludes という対カルト対策機関があることは既に述べた。今回は当機関の 2021 年の活動報告書を見てみたい。

カルトは今や宗教団体や宗教思想に限らず、多種多様な形態を示している。したがって、カルトに対する危機感がライセンスと直接つながるわけではないが無関係でもなく、カルト運動の傾向やどういった点が問題視されているかを知っておくことは、布教の観点から重要だろう。

この機関には 2021 年、4,020 件の通報があった。通報と訳しているが、使用されている Saisine という言葉には、ある運動や行為、個人とカルト的要素の関連性に関する質問も含まれる。通報数は 2015 年と比べると 86.1%、2020 年からは 33.6% 増加している。

2020 年 7 月以降、内務省の管轄に入っている同委員会は、連帯省、保健省、教育省、司法省などからアドバイザーを迎え、より効果的で包括的な活動をめざしている。通報数の増加は、この機関が社会的に認知されてきているからとも言えるが、コロナ禍の影響も強く指摘されている。「ガスのような」という形容詞を使い、コロナ禍で自由な活動を奪われ不安や不信感が募った時代に、カルト運動がインターネットを利用し変幻自在でつかみどころがない存在になっていると警鐘を鳴らしている。ソーシャルネットワークサービスを使う指導者を「グル 2.0」(第二世代のグル)と呼び、仮想空間を使って被害者を現実世界で苦しめているとしている。また、子どもに関する通報も 396 件あったという。2021 年に扱われた主な通報の内訳は以下のようになっている。

- マルチ商法 86 件
- 職業講習 87 件
- コーチングを含む人間形成講座 173 件
- 陰謀論と反ワクチン運動 148 件
- 医療行為 744 件 (うち代替医療 520 件)
- 疑似科学 35 件
- 瞑想とヨガ 116 件
- エコロジー 27 件
- ニューエージ運動 65 件
- スピリチュアリティ、シャーマニズム 159 件
- キリスト教系運動 293 件
- 仏教系運動 26 件
- ヒンドゥー教系運動 16 件
- イスラム教系運動 10 件
- ユダヤ教系運動 3 件
- エホバの証人 99 件
- 人智学 31 件
- サイエントロジー 33 件

また、特に医療問題で顕著だが、特定の指導者や組織ではなく、未承認の治療行為などのメソッドが通報対象になることもある。代替医療そのものが危険視されることもあるが、通常医

療を排除する行動も含まれる。

宗教団体の多くは、1901 年のアソシエーション法や 1905 年の政教分離法にのっとって合法的に設立されている場合が多い。税制優遇など国家が危険な宗教団体を間接的に援助する形になることを避けるため、2021 年以降宗教団体に関する制限が強化されている。

こうしたカルト団体を見分けるための 10 の基準は以前に述べたので省略するが、被害を受ける過程を 4 つに段階分けしている。第 1 段階は関心を持たせること、第 2 段階は人格を破壊すること、第 3 段階は人格を再構築すること、第 4 段階はそれを強化することである。場合によっては反論が許されなくなったり、罰則が与えられることもある。こうして個人や団体への傾倒が強くなり、完全な従属体制が作られる。この精神的な服従がカルト行為の大きなポイントであり、分離主義 (séparatisme) や陰謀主義 (complotisme)、サバイバリズム (survivalisme)、過激化 (radicalisation) といったその他の問題行動と区別される点である。それらの場合でも無条件にある信条に服従することはあるが、影響を受けているだけでは自己決定力や判断力、自己批判の力が失われたとは言えない。

陰謀論は、その考え自体ではなく、それによる行動が暴力や憎しみ、差別といった形で個人に悪影響を及ぼす場合に問題視される。このカテゴリーでは、クリスティアン・タル・シャラー (Christian TAL SCHALLER) が、疑わしい医療思想の持主として名前を挙げられている。彼はコロナ禍の際に、YouTube 上でワクチン陰謀論を唱えていたが、それ以前の 2016 年、彼の講習会に参加した目の不自由な息子が 30 日の断食を促され、不安定になった状態で金銭の要求をされたとの通報が届いて、同委員会がその動きを注視している。

サバイバリズムは、自然災害などに備え技術や対策を練っておくことが主眼で、基本的には危険とは言えない。しかし、過激な例としてアメリカ発祥のラムサ (Ramtha) が挙げられている。2008 年にフランスに登場し、バンカーと呼ばれる地下室のようなところに蓄えを備え、終末の世からの救済を目指すグループだが、家族との連絡を途絶えさせたり、高額な講習会を行ったりと危険な要素が含まれているとしている。

分離主義は、多くのカルト教団が使う手法で、両者の線引きは難しいという。いずれにせよ、国や社会の仕組みを拒絶し、仮に社会生活を営んでいても外の世界を悪としてとらえ心理的に社会と断絶する考えである。過激派は、ある個人に精神的に服従することがなくても危険行動にでることがあるが、カルト的要素も含め分離主義や陰謀論など複合的な要素が絡んでいる。

このように随所に示唆深い報告が見られるが、次回もこれについて読み進めたい。

[参照]

MIVILUDES2021 年 活 動 報 告 (2022 年 11 月 3 日

<https://www.miviludes.interieur.gouv.fr/publications-de-la-miviludes/rapports-annuels/rapport-dactivite-C3%A9-2021> 2023 年 12 月 6 日閲覧)。

## イスラームの人間観①

### 宗教学における人間

いわゆる「宗教」と呼ばれる現象については、これまで多くの定義がなされてきた。18世紀以降の宗教学研究のなかで明らかになってきたのは、宗教を普遍的なかたちで定義するのは非常に困難だということである。

こうした困難さの一方で、宗教をめぐる確実にそうだとと言えることもある。それは、「宗教」には担い手である人間が存在する／した、ということである。私自身の経験に即して言えば、どうしても宗教を教義（教え）の視点から見てしまって、信仰者である人間の側に立つ視点が足りなかったように思う。

宗教を定義したうえでの宗教理解は、確かに宗教学という学問分野がもつ特徴の一つでもある<sup>(1)</sup>。しかしながら、筆者はイスラームのテキストに向き合った信仰者の言葉を読むことではじめて、宗教についての理解が深まったようにも思う。この意味では、イスラームの人間観は、担い手であるムスリムに向き合うことによってこそ理解できるのかもしれない。そこで今回は、人間という存在がイスラームのなかで、どのように論じられてきたかについて取り上げたい。

### アダムの創造

クルアーンにはイスラームにおける最初の人間であるアダムの創造が端的に記されている。ユダヤ教・キリスト教では、聖書に人間が「神の似姿」として創造されたと記されている。その一方で、イスラームではこうした記述は、預言者ムハンマドの言行録であるハディースに残されている。

人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。彼（神）は一つの魂からあなたがたを創り、またその魂から配偶者を創り、兩人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる。  
(クルアーン4章1節)<sup>(2)</sup>

イスラームでは、数えきれないほどのクルアーン注釈が記されている。聖典の理解は必ずしも一つである必要はない。なぜなら、神は人々が置かれた状況に応じた言葉を発しているからである。したがって、今ここで啓示を読む人の心に届く“コトバ”を引き出すことができるのが、聖典の特徴である。

先のクルアーンに対する注釈として、著名なクルアーン注釈者の一人であるイブン・カシールは次のように解釈する（〔 〕はクルアーンの本文）。

神は自らの力を通して、一つの魂—すなわちアダム—から彼ら（人間）を創造した。〔またその魂から配偶者を創り、すなわちイヴを、彼の左のアバラ骨から創造した。そのあいだ、アダムは眠っており、目覚めると彼女を見て驚いた。〕<sup>(3)</sup>

アダムは地上の土塊として固められた後に、神によって魂が吹き込まれた。その後、神はアダムを眠らせて、彼のアバラ骨からイヴを創造した。その後、全ての人間はアダムとイヴのあ

いだから誕生した。それゆえに、人間は「一つの魂」から創られたと、イブン・カシールによって理解される。「人類」を表すアラビア語が「バヌー・アードム」（アダムの子孫たち）であるのは、アダム創造に関わっている。

### イスラームにおける人間の誕生

イスラームの聖典クルアーンには、人間の創造や終末における審きについて記されている。クルアーンでは、創造から終末まで直線的な時間軸で理解することが可能である。つまり、すべての人間がこの直線的な時間軸のいずれかで誕生して死ぬこと、さらに、神は現世での生き方に基づいて、来世で楽園か地獄のどちらで暮らすかを決定するということである。

クルアーンには「人間章」（Sūrat al-Insān）という章があるが、そこには人間創造が次のように描かれている。

人間には、何ものとも呼べない、長い時期があったではないか。本当に我（神）は彼を試みるため混合した一滴の精液から人間を創った。それで我は聴覚と視覚を彼に授けた。我は人間に（正しい）道を示した。感謝する者（信じる者）になるか、信じない者になるか、と。（クルアーン76章1～3節）

すべての人間は、生殖活動を通してこの世に生まれ出でることになる。それまでは私たち人間はどこにも存在しておらず、何ものとも呼ばれない期間であった。言い換えれば、人類の創造以降、人間が一つの命として生まれ落ちるまでには、相当の長い年月が経過しているのである。

「混合した一滴の精液」について、イブン・カシールが記すところによれば、「男性の水（精液）と女性の水（精液）を混ぜたもの」である<sup>(4)</sup>。クルアーンが記された時点では、精子と卵子の受精は知られていなかった。その代わり男女ともに精液を有していると考えられており、人間が誕生するには双方の精液が混ざり合う必要があると考えられていた。

少なくともクルアーンを解釈するレベルでは、人間は男女から成り立っている。しかしながら、男女の関係については、どのように理解されてきたのだろうか。今回はこの点について考察したい。

〔註〕

- (1) 2010年に開催された国際宗教学宗教史学会（カナダ・トロント大学）では、「宗教—人間の現象として」（Religion—A Human Phenomenon）という共通テーマが設定された。このことも、人間側から宗教にアプローチする動きの重要性を理解できるだろう。
- (2) 訳出に際しては、『日亜対訳 注解 聖クルアーン』（日本ムスリム協会）を参照したが、文脈に応じて変更した点もある。
- (3) Ibn Kathīr, *Tafsīr al-Qurʾān al-ʿAzīm*, Hānī al-Hājj (ed.), Cairo: Dār al-Tawfiqīyah li-l-Turāth, 2009, vol. 2 in 8 vols., p. 188.
- (4) *Ibid.*, vol. 8 in 8 vols., p. 188.

## 7. コロンビアの非日常 1：お祭りの話 その3

元天理教コロンビア出張所長  
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

世界において毎年大規模な伝統的なお祭りが色々な国で開催されている。ラテンアメリカでは、ブラジルの「カーニバル」、メキシコの「死者の日」、ペルーの「インティ・ライミ」などが有名である。

このような伝統的なお祭りに参加したり、それらを見学したりすることは「非日常」の世界に自らを誘い入れる典型的な行為である。コロンビア人は、非日常が日常化するほどお祭り好きの国民なのではないかと思うくらいだ。本稿第5回で言及した「コロンビア五大祭」を見ていきたい。五大祭りとは次の通りである。

- (1) バランキージャのカーニバル (El Carnaval de Barranquilla)
  - (2) 黒と白のカーニバル (Carnaval de Negros y Blancos)
  - (3) 花祭り (Feria de las Flores)
  - (4) カリのお祭り (La Feria de Cali)
  - (5) ペトロニオ・アルバレスの太平洋岸音楽祭
- (1) バランキージャのカーニバル (アトランティコ県バランキージャ市)

起源はいくつもの説があるが、コロンビアを代表する伝統的かつ大きな祭りであることは確かである。バランキージャとは国北部地域の国内4番目の大都市で、カリブ海(大西洋)に面することから、外国からの影響の受けやすい地域である。16、17世紀にヨーロッパの移民たちが持ち込んで、欧州の慣習とバランキージャの民衆信仰である土着の先住民儀式及び(1)アフリカ系の伝統儀式が融合した、という起源説が有力である。

バランキージャのカーニバルはカーニバル(謝肉祭)と呼ばれる如く、毎年復活祭(英語でイースター)に合わせて日付が変更され、四旬節(イエス・キリスト昇天)の40日前の「灰の水曜日」の4日前から開催される。よって毎年カーニバルの期間は変動している(2023年は2月18～21日まで)。カリブ海地域の民衆と文化要素に溢れたこのカーニバルは、フロートや山車、音楽グループを伴った「花の戦い」「ミスカーニバル」から始まる。「花の戦い」とは仮装したグループとフロートの大型パレードで、動物をモチーフにした仮装、大きな頭やスーパーヒーロー、アフリカ系の黒人などがこの仮装グループの一部を担う。2008年にユネスコの無形文化財に認定されており、とにかく陽気でエネルギーに踊りまくる。この数日間、街は地元住民と観光客で賑わう。

(2) 黒と白のカーニバル (ナリーニョ県パスト市)

黒は「黒人」、白は「白人」を表し、また様々な文化の融合を強調している。それは、アンデス山脈地域とアマゾン川流域の先住民文化と太平洋岸地域のアフロ系文化である。

このカーニバルはコロンビアにおける人種の伝統、先住民、奴隷制度と独立を物語っている。開始されたのは1546年とも1607年とも言われている。元々このナリーニョ県サン・ファン・デ・パスト(通称パスト)市に発祥したのではなく、ポパヤン(カウカ県首都)の黒人奴隷住人が1日の休暇を要求したことに発する。当時のスペイン国王は勅令によって休日を1月5日とし、喜んだ黒人住人は、ルーツであるアフリカの音楽と共に通りで踊って、その近くにいた白人に墨を塗ったという。その後、1854年にパストにこの文化を伝えたと言われている。1912年には、これに加えて「白人の日」が追加された。県内の町村でも隣県カウカ県などで同時期(毎年1月2～7日)に行われている。2000年9月30日にユネスコ無形文化に認定

された。

(3) 花祭り (アンティオキア県メデジン市)

最近では、インターネット上でのラテンアメリカのお祭りトップ3には、リオのカーニバル(ブラジル)や死者の日(メキシコ)と並んで「花祭り」が必ず入るほどポピュラーなお祭りである。

シジェッタ(スペイン語で大椅子の意味)という担ぐ道具に色とりどりの花を盛り付けてパレードするのが中心的行事である。花を担ぐ人たちのことをシジェテロスという。同時に花飾りのコンクールが行われ、シジェテロスの独創性や技が競われる。この習慣は植民地時代(16世紀～19世紀)に山の村々から人を運搬したことに由来している。開催の期間が長く、2023年は7月28日～8月7日の間行われ、上記のシジェテロスのパレードの他、コンサート、自転車・バスでの花見ツアー、盆栽の展示会まで、見事花づくしであった。この花祭りは1957年から開催されている。

(4) カリのお祭り La Feria de Cali (バージェ県カリ市)

12月25～30日、毎年年末バージェ県の首都カリ市は祭りで熱狂する。カリは「サルサの首都」とも呼ばれ、人が集まればサルサダンスを踊る。5日間仮設の巨大テントでのコンサート、ダンスクラブ、アルコール・グルメ、クラシックカーのパレードが催され、メイン通りではサルサスクールのコンクールを兼ねてのパレードが行われた。数年前には、天理教出張所も協力した日系移民のパレードも行われた。カリのお祭りが初めて開催された年は1957年、メデジンの花祭りと同じ年である。

(5) ペトロニオ・アルバレス音楽祭 (バージェ県カリ市)

これもカリ市で行われるお祭りであるが、上記の4つの「お祭り」とは少し様相が異なり、アフリカ系ラテンアメリカ(アフロ)音楽に特化したフェスティバルである。コロンビアの歴史的文化背景の賜物であると考えられる。植民地時代の初期からコロンビアには西アフリカから黒人が先住民に代わる労働力として入ってきた。彼らは祖国の文化と習慣を伴っていたが、ラテンアメリカと同化した。その一つに音楽がある。楽器においては、マリimba、クラリネット、バイオリン、グアスカ(打楽器の一種)、ボンボ(太鼓)や多種のパーカッションの鼓動が人々の心をも打つのである。

コロンビアの西部のチョコー、バージェ、ナリーニョ県の太平洋岸はアフロ系の人たちの割合が高い。毎年、8月の中旬に6日間行われ、200以上のアーティストがアフリカをルーツとする音楽で民衆を魅了し、白熱するライブが延々と披露される。

上に述べたように、伝統的フィエスタ、カーニバルで陽気に踊ったり、歌ったりするラテンアメリカの風習の中にあって、楽器を入れて歌って踊るお道(天理教)の祭典はどのように映っているのだろうか? 宗教儀礼と理解していても、他にはない「おつとめ」である。次回、このことについて、「諸宗教の集い」と関係させながら述べることにしたい。

[註]

- (1) “5 ferias y fiestas colombianas que debes visitar al menos una vez en tu vida” <https://www.canalinstitucional.tv/ferias-y-fiestas-colombia-top-5-carnaval>
- (2) Medellín en la Feria de las Flores “<https://www.medellin.gov.co/es/feria-de-flores/lo-que-hay-que-saber-de-la-feria-de-las-flores-2023-programacion-eventos-historias-datos-silleteros-y-otros/>”

## 第 362 回研究報告会「近代期天理教と哲学：高崎倫常の神学思想形成におけるカント哲学の影響について」（10 月 24 日）

ジェレミー・ウッド

本報告は、近代期に活動した天理教教学者（神学者）の高崎倫常（1859～没年不明）の有神論、特に神の存在証明に関する議論に着目し、彼の神学思想形成におけるカント哲学の影響について検討しようとするものである。

倫常は東西の宗教や哲学に造詣が深く、彼の教学研究の集大成である『天理教神学』第一部「基礎神学」において、哲学的観点から神の存在証明をめぐる論を展開している。彼の哲学的立場は、基本的にカントの認識論に立脚するもので、理性のみによって物自体を認識することや神の存在証明は不可能と考えている。

しかし、倫常はカントの認識論に問題があると指摘し、人間側から神の存在証明ができなくとも、神の方から啓示を受けることにより、人間は神の存在を確信することができるかと主張する。倫常によれば、神の存在証明は人間の有限なる知識・理性によってできるものではない。教祖のひながたの道を辿る自身の宗教的体験によって、神の存在を確信することができる。倫常は、このようにカントの哲学的課題を神学的に解決しようとした。

## スペインでの国際会議に参加（11 月 16～18 日）

澤井 真

スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学（天理大学の姉妹校）で開催された第 18 回国際哲学会議に参加し、発表を行った。会議のメインテーマは、「世界地図からみた哲学—グローバル世界においてナショナル・フィロソフィーについて考える」であった。筆者は 2 日目午前中の日本哲学のセッションで発表した。会議では、フランスやポルトガルなどの国から参加した研究者が登壇し、それぞれの国で論じられてきた「哲学」を、いかにグローバル世界のなかで位置付けていくのかが論じられた。とりわけ、日本哲学のセッションでは、「哲学」という欧米由来の言葉をいかなる仕方で用いるのか、日本における思想伝統において「哲学」という語が果たす役割が論じられた。

なお、天理関係者の参加は以下の通りである。

澤井義次（天理大学名誉教授）

アルバ・イグレシアス（元天理大学研究生）

高橋美奈子（サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学大学院・2024 年度到天理大学おやさと研究所にて研究予定）

フレデリコ・オリヴェイラ（サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学大学院・天理大学交換留学生）

ファン・ロペス（天理大学国際学部）

澤井努（広島大学人間社会科学研究科）

澤井真（天理大学おやさと研究所）

## 2023 年度宗教研究会を開催（11 月 28 日）

## 「アヴラム・デヴィッドソンのキプロスとトルコへの旅」

オックスフォード大学教授でトルコ文学を専門としているローラン・ミニョン氏が、表記タイトルにて発表した。アヴラム・デヴィッドソン（1923～1993）は世界的に著名な SF 作家であり、彼の作品は日本語にも翻訳されている。彼はユダヤ教正統派の家庭で生まれ育ったが、晩年は天理教に改宗して生涯を終えたことで知られている。彼は同じ場所に留まることを好まず、世界各地を旅しながら自らの作品の着想を得た。

とりわけ、キプロスへの旅は、彼にとって重要な役割を果たしていた。というのも、キプロスは、オスマン朝の支配地域として多くのムスリムが暮らすとともに、第 2 次世界大戦中からイスラエル建国までのあいだ、イギリス領として 5 万人ものユダヤ教徒が難民として暮らしていたからである。ギリシア系・トルコ系キプロス人や、アルメニア人やアラブ人が入り混じる他民族的な状況下にあったトルコやキプロスの旅の知見を、デヴィッドソンは自らの SF 文学作品の中に織り込んでいったのである。（澤井真 記）

## 2023 年度公開教学講座のご案内

## — 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（9）—

2023 年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

第 1 回 6 月 井上昭洋所長

167 話「人救けたら」

第 2 回 7 月 尾上貴行研究員

168 話「船遊び」

第 3 回 9 月 金子昭研究員

122 話「理さえあるならば」

第 4 回 10 月 澤井治郎研究員

146 話「御苦労さん」

第 5 回 11 月 島田勝巳研究員

165 話「高う買うて」

第 6 回 1 月 堀内みどり主任

113 話「子守歌」

グローバル天理

第 25 巻 第 1 号（通巻 289 号）

2024 年（令和 6 年）1 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan